新板
法入

家訓不換抄

四之巻

へ13
3605
4

門へ13
號 3605
卷 4

家德五葉松

四之巻

第一　大鴻基の門宇を振れる琴

三橋文庫

月孫　大王齋の院

古家老へ市家乃福太く
も孫に古へ忠義の宝
槌と鑿を相ひかん法眼乃働

第二　大黒に袋井とん相應の出立
一ふたつゝ物をくらはくれ白狀
二ゆ兎ゆゝく形のもどく
三にらぐの仕合ゆよひきゝる謀

第三　七つなぐくの遍留ぎゆく
八つ中ゆ女房のなげき
九つたゝに出ゆるさいで
十でゆるひ不人旅侍れ門ゆ

㊀大酒飲の内實は姫が琴

正月をむつまじくいはうもむつまじ月のめく新屬
たゝひにうあつまりくゝ月の中ゆもすゝ月のめ
大家人の春ハ民俗より揚を物をくゝ。延喜式の和ゆる忌詞もあり。
いとゝ物ゆ祝ぐくゝ。延喜式の和ゆる忌詞もあり。
祝ひとゝぐく家もゆくゝ。ゝ。さくゝ山之位の位ゆ屋へ
年間して。大松家のあとゝ家名ゆ年ハさぐ今ハ大松とゝのり。
供ゆくゝ演松入ゆ松ゆ乃書初ゆ五穀のかざりして。
門ゆくゝ世人ゆてもかゝゝゆる大祝屋人とひくゝきゝ人形一つ。
大黒家に仕ゝく松竹梅屋の門ゆらひ。金銀と仕て家へ
ゆとゝ。ゆ元次ゝのゝ入とゝ門平九ゝ人ハ供の人数ゆまゝゝ。ゆ物と

めく中へ男でいらしゃるとおっしゃる。五郎のめいよう〳〵ひろい。
やあらんはどや。音和のうどりく婚姻をあなたとおっしゃ
へらあの娘きっとこの方と家老伴京海老義がいう声がれ
出あると。法村法眼声をしてどくも世なる七三郎とのぐ
ずも。宋の方へおくりむとびあるらて出るのあなたはく
せのする何もふとまひとへめくれ名内伴京海老義元四郎
小袖とてみく立いで。大和柏とりの四段芝居ようまびっうみ
取紙はんといでゑ方郎ときゆき大和平九郎ゆとる兼義
の見づま姫ひつきあう大和郎の家智へとのいいひ名付でさ仕べ。
ぎいまとてはく学ふた七三へおくすひうく。平九郎へ出智入
あり花み形ひなりとみつらあくあく結納の貝孫りくれ
ぎくでござると。貝孫とくさせべ海老義ひきよ及ぶ七三郎

四郎くとせーむと若は七三郎ゆしん三位殿のみ
姫うあのりみく一さん七三郎をとりいまけへせの瀬川と祭
さーかさ。見づま姫へふくいんの紙よりせ海川へかく名
七つきとあれねうとんくいよくいいせいにけづひっくとん
きうあば七三郎と祭と見づま姫とうーとさねうりさわば
平九郎へ祭四郎がありまひ和ぐくもでざーねどいそのうけさねの
いうくすくたのくうあくうけうもきんどくみ七三郎とふうん
なる付へいたうくあんもおそ。それ貝孫へあうんいさんびいよ
きうく海老義がのづりうと仕。四郎うと人三位殿伴京のくぶり
なれしべ。平すくあう海老義へうくさうんびいすへ海老義へ
あくれ和ぐくねまするといあ和ぐ和ぐくたぐ小武蔵し。
海老義へかくへ貝孫くづくさん海老義に貝をつけて入けるば。

ありゝ
まろさぞ

みゝにはせりていづれ紙おくゝ出ようをうゝ。
あ人とも梅のトへたのびいりてどんあゝ出クる。たゝ弁ゝくけさ
牧白人梅元禁屋の追風まさりや。梅花の玉藻まさつと時を在
聖紙ひ人元づま姫ハ元うけ文ゝそ俳ゝどのふゝきれ梅めく
一琴仏姫ゝ文ゝ出ようゝ反花ゝづゝ。の紙ゝ出もあそみうう。
あ月ゝ花ハうゝたるゝ〻ゝ〻ひのふゝちゝけゝく。ゝうハ中ゝく美反花と
ゝゝ月ゝくいゝ〻ゝゝゝゝ〻ゝゝ〻ゝ〻ゝ〻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

性質ものこの身のうち移りかはる人のかたちもまたかはりて
さしもみてもむとにたづねとはせたまふ人の用り
こんとにたるこて軍略も武器も部屋をなつかさ智の
名ぬぬ仏法好きのつきの思ふ心にかはりぬ宝とぞ
うつくしきあるべきもの大松殿さうぞくはうい
宝ぞ内へとくさつそくに部屋のあるべとせん所と手みたる
その宝をあてむこにはんとのたうとうづく
たくさの宝ふ手ぜん行きのもたまたまの宝殿たのびぬすま
ちてあたぐさたまたまあてもたとねたるものはなとへ
ゆとへとむとみてたれのあとつぐさんとはそのこゆゑ一ぞと
いくせもそそ法眼ぞたのあたうこのの宝のたつぐあれ手内ぐ
なたうたくさんたよたうしべ一さんを思ふくゆとてもたまたまの

のあれはくさんたみさへとたぐ思ふ心にたるとたるぞ手
出家ちされたるへへぞうでいつまとてもたたたぐつく番でかし。
宝とうつくしきたるの智恵はくへとむこにみくそのたうたる
りこせつぐちのこの角へ宝のこれかたうのち手みたる苦たるの
ぞとりされとたたりをたうし手みたくへ又たたと新人宝ぞ三ぞ
とつたりあのうでなり紀はかのぐりゆさうし修善のうへ人の大宝
面紙たくさんへるたぐ。銀井大宝
大松の部にたぐれまでと。五年ちたる七月十百ぬこうり頻よりびうり
つたりまぎれみぞたりたみたとたうへあぞ。宝殿ぞたのびいうと。
新仏九のたくさんをゆとうとそうぞ手。人さうりぞ銀井商ぞは
たくさんたりぞと手みたくたに部屋とたうたぞ手みたくたり
ぞたたとたうたぞ。その対たて自者のたくさとぞたうみたたと

とてうけ出ぬ。ゑとやろうろぼ〜うぐたゑ。ゑ変化にも
一ぐんぷ細面あつくも。親子の母にひろしぐ〜ことあつく
面ぐんなさりんすさまとゑんあくせ。ゑ母とゑづ〜れどが宝船
と出小世紀とてんとにあり。そ〜ぐ〜あ〜ぐ〜ゑ。ぐ〜ゑ
ゑの父三角ゑつ〜ゑとあ〜ゑ。一ゑいとぐ〜ぐ〜一味させ。ゑ
〜ぐ今海老義ゑのことぐ〜ゑ。ゑ〜ぐ〜ゑ三位のことゑ。ゑ細実仁義の
ゑさぐ紀盛じゑ〜ぐ〜ぐ。今日の桜まいぐと。ゑぐいよのつ〜ぐ〜ぐ。ゑ
ゑゑゑとい〜ゑ。ゑ桜ゑ紀づま姫とつぐや紙ぎにて月ゑゑ。
ゑれて〜ゑ。ゑ世ゑゑ紙。ゑゑ〜ゑ。ゑ〜ぐをゑぬれゑ。ゑ
巣つゑ〜ゑ〜ゑ。ゑんと大松のゑ。ゑ細ゑゑ。ゑ〜ぐゑ。ゑ
いゑ紙。ゑ九ゑとゑ〜ゑ〜ゑ。ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ。ゑ海老義
ゑ〜ゑ〜ゑ〜ぐ〜ゑ。ゑ〜ゑ〜ゑ。ゑ〜ぐ〜ゑ。ゑ〜ぐ〜ゑ。ゑ

関ふ子の弟大義あげ〜ぐ〜ゑ。ゑ大ぐ〜ゑ。ゑ〜ゑ〜ゑ。ゑ〜ゑ〜ゑ。ゑ
ぐ〜ゑ〜ゑ。ゑ〜ゑ。ゑ〜ゑ。

程の伽とこのこゝろをかどをもつてこゝろのつるぎとなづけさせく
切られども。雲へ上へ入く響はあひのとさやてゝ。濱川も姫をとひ
つれこゝまでゝ。このこゝろのでゝ。梅ごくもむりんの極でも
出ぬ。たゞ。ものもなりく。毒のよくこゝろにもあつまれかゝひ
そこれこゝろ者うつくゝかれこのゝ。たゞ。たゞこゝをなり。
此ゝやゝ。ゝ。ゝ。

あなたの子供さあ
こんハ
こんハ

とりつきさはぐとうけてくびをとる守殿より石勘ゐると
とり出し。あ公大きを石勘ゐるあやまりけと立さらせのこと
いつぐ法眼。御りはいとりーしてい大くさるるべくつくとてかれあぐり。
観音のうちみぞ人にくるそくはいくるべくつくとてかれあぐり。
ぶんくはたはたおゆりといつぐ。奈良宿まいりもきうゆをまえ
うちの男をいたぶーとぶとぬをしてゆりをる

三 七つ長くの逗留宿

金魚観さる不安りといつぐも饌にあくべく風流を紀寿と
はくくに安も。まにおくはく法家さるゆみ情姫ー丹後乃
矢とそづひぐんびとまねはあくせかれ赤板立長宿家
うつのみみさかぶーく。るかいひいめく出つをるゆゆ内ぐうり
居くいくの気まるるかいぐと。ぶれ約手とつをく初の町と

ぐとうめぐひありれをるは法眼へさてるの矢まいてれ〜留をに
女庭ちげののまふのくりくのくまいをるゆをるとの紀。
夕飯とすをるれいぐ無宿ざうのるるはぐくの仏ぐん紀石
ぐるくれつをあやをあぐ法みなれ彩色をるをさ乳色
あうをれども。あ面宿づひとりのもぐさとぶふをるね膳ふ
をるう。寿とるるをるぶ十二はこいをるいるより眠るめる。あ
ひるるのをぐぐは無のいとあをるぶんをるるうのるね
いのるとへなりをるぶくをるとりへどもせんすぐなくぶをるめ寿を
もをぐうび百宮の矣もをるーをくて世へるるきるくふのをぐり
くる歯ふをきれをるーとぶぐるくやくるぐやぶまづ法眼矢と
みをくくるぶをるふをるをせをるぐに修るふれ〜やをるる正ぶ〜家
ぶやるれ年ぐ供ーてのるれべぶるるぐんせ西

つまくちらうすのうつくしきこのうへにかのこのうへ
にまとのむこのはなをかたどりたるかのこ
ぢりぢりこはぎのうへにかのこのうへにかのこ
ぢりぢりこはぎのうへにかのこのうへにかのこ
ぢりぢりこはぎのうへにかのこのうへに

ゆくすえはいかがよいかとこゝろやるすべなくて
なげくに人がものいふをきくあやまちをしへあるに
ものをきいてのちにこゝろのうちにおもひかへして
ものいふなとおしへをしたるのちにこゝろのうち
にあるものをいやしくおもふ人をはなれて
ものをいふやうはまづのりのうちのうちまでかきいれて
ものをいふべしたとへのものもみるにもこゝろ
をつけてみるべしとをしへたるのちにこゝろ
のうちに

まをせう弟をこれへ召出て如記つてきれ。そのうけとるみやく
わうきん殿へ下つて。如類へこれをみせくれ。ろうけべんとと
ゆどくうの味方をすぐに。ひとうきとうとと。法眼へ参りけ
せひもうきとうきんをやくそくせ。一ぢひるぐ。さねひは眼。
さあうつく猪頭やねうといつふ。うこを味つてうつけ合
のよもかれのくわ。ぢとのぐして知やとげぬいれくぐ色ろ
つくぐ。如記まぐのうけあひりきうへたきれぬそもやく
あちごとかくりにくるるとうとう。ふもこぐもものくるれ。
法眼の純わくぐゆぐ。色ん。女房。わぐりへの中でも
義和へひつ。ものひ。一紳をに如記と宮くろうきみ
くるいきんつきうきうへきものたぐひ。ひくへくんとわけへ如記。
如ぐへくうきかくるせんへあるまへ。をてるのやくるぐさんとうひ。

法眼ぐたとかくねうるのひ腰やぐにお如記さする乱うきうう
いく如ここへらあとぐん殿よりびようせいやくいふをとりうへを。
くるいきんぐんとわくるゆれば。長もたんぐ。女房へすぐう
つあてなもぐども。武ぐにせまるうさいごとやすへぐもむるにも
さあぐくぐ。なくようあのうすぐなれぐ。いあをわぐぐもち
くるかどる如くすぐどくうひぐうのみへ法村のお鶴ふ
にのひぐ多へをよりいるるふみやくにもうけ入。家望長に
まややぐのあとをむくんをこいづまぐ。くるーむ声もよう
あく出ろうもぐあるれぐふ。ひ世ろ美法さあもう。

巳之巻 終

○けものとりこの知をドンとの
附り　仰せ拙に長尾の出る物い京幕人留豆打中
白雪の道と分る枝乃下の〳〵思ひ寄る窓

近く出来

風流門中鳴

全部五巻

美二

盃の湯気ゆらりあつ沢を湯に乳ひ乳ひ
ゆ合ちてこ丁人が中へとぶり九甲斐国

繪本池の蛙後編

近く出来

繪本鸚鵡返

全部三巻

撰者東鶴

たこつ五枝追分出ドハいたこ長ハ出ドハ